

3. 調査結果(二次分析 2)

3. 1 回答者の属性

本調査の回答者の属性を以下に示した(図表 4-7、図表 4-8)。回答者の男女の割合は、男性よりも女性の割合が高くなっているが、登録指導員の男女比(男性 46.2%、女性 53.8%)と比較するとほぼ同様の割合であった。

年代別にみると、登録者数全体では 20 代の指導員数が 4 割であるのに対し、本調査の回答は 50 代・60 代の割合が高い。

地域ブロック別では、登録者数全体の割合とほぼ同様の傾向であった。

取得資格の種類別でみると、日本障害者スポーツ協会公認の障害者スポーツ指導員(初級・中級・上級)の登録者(21,924 人)のうち、初級指導員は 18,841 人(85.9%)、中級指導員は 2,395 人(10.9%)、上級指導員は 688 人(3.1%)となっているのに対し、本調査の回答者は初級が 72.5%、中級が 20.2%、上級が 7.3%と、登録者の割合よりも中級・上級指導員からの回答の割合が高い。これら回答者の特徴を念頭に置いたうえで、結果をみていきたい。

**図表 4-7 回答者の属性
(全体・性別・年代別・性別×年代別)**

	N	%
全体	3,791	100.0
性別		
男性	1,845	48.6
女性	1,945	51.4
年代別		
20代	613	16.2
30代	712	18.8
40代	676	17.8
50代	791	20.9
60代	737	19.4
70代以上	261	6.9
性別×年代別		
男性		
20代	206	11.2
30代	315	17.1
40代	326	17.7
50代	390	21.1
60代	411	22.3
70代以上	197	10.7
女性		
20代	407	20.9
30代	397	20.4
40代	350	18.0
50代	401	20.6
60代	326	16.8
70代以上	64	3.3

**図表 4-8 回答者の属性
(全体・地域ブロック別・職業別・資格種別)**

	N	%
全体	3,791	100.0
地域ブロック別		
北海道	148	3.9
東北	336	8.9
関東	1,069	28.2
北信越	298	7.9
中部・東海	468	12.3
近畿	643	17.0
中国・四国	374	9.9
九州	454	12.0
職業別		
福祉関係施設・機関	845	22.4
無職	746	19.8
教育関係の施設・機関	497	13.2
スポーツ関係の施設・機関	286	7.6
医療関係	285	7.5
障害者スポーツセンター	101	2.7
学生	93	2.5
上記以外の職業	923	24.4
資格種別		
初級	2,743	72.5
中級	763	20.2
上級	278	7.3

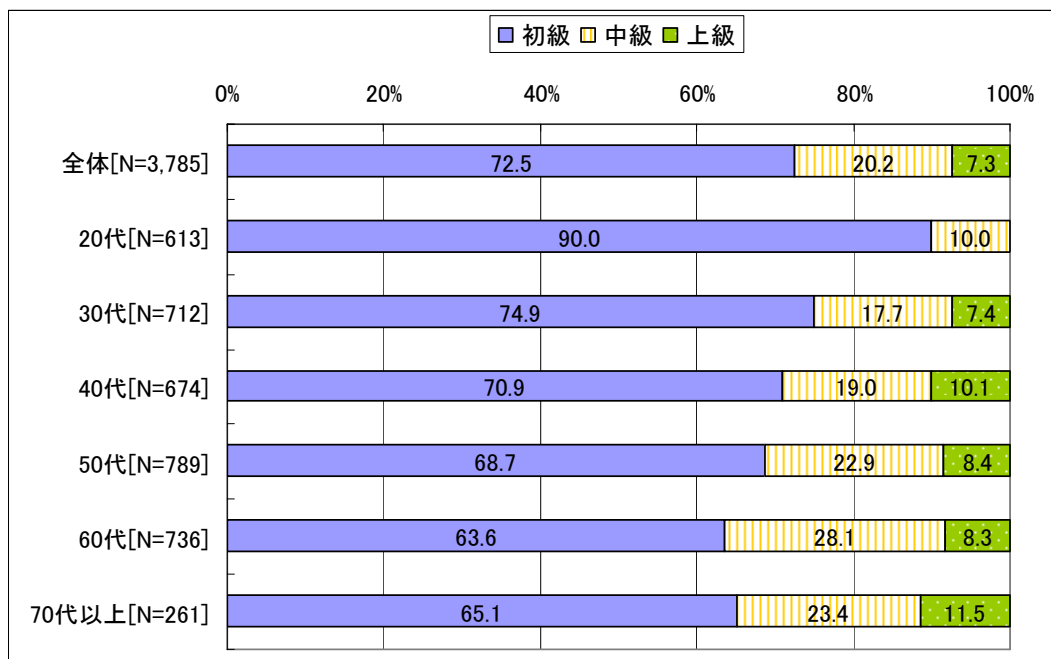
3. 2 指導員資格の取得状況

(1) 資格の種類別取得状況

① 全体・年代別

年代別に資格種別の割合をみると、20代は90.0%が初級で、中級が10.0%であり、上級はみられなかった(図表4-9)。60代は中級が28.1%と他の年代より高く、40代と70代以上では上級がそれぞれ10.1%、11.5%と高かった。

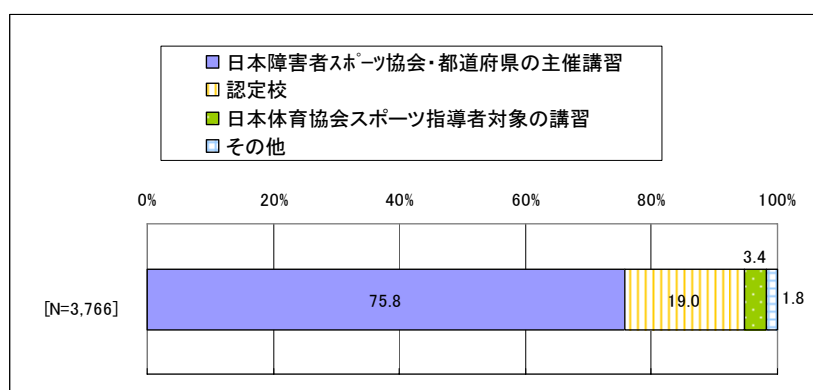
図表 4-9 資格の種類別取得状況 (全体、年代別)



② 資格取得時の受講講習別

資格取得時の受講講習の状況をみると、「日本障害者スポーツ協会主催の講習会または都道府県での講習」での取得者が75.8%と最も多く、次いで「認定校」が19.0%、「日本体育協会スポーツ指導者対象の講習」が3.4%であった(図表4-10)。「その他」では、日本理学療法士協会主催の中級スポーツ指導員養成講習会や、市町村の講習、市の障害者スポーツ教室などの回答があった。

図表 4-10 資格取得時の受講講習

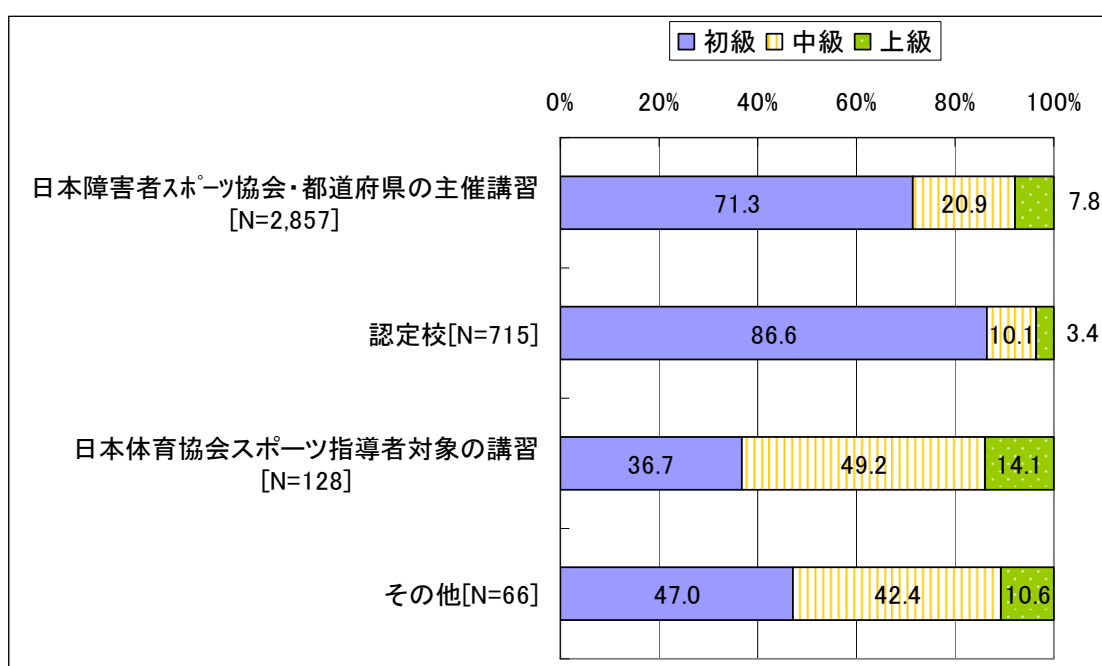


資格取得時の受講講習別に、現在の資格種別の割合をみると、「日本障害者スポーツ協会および各都道府県の主催講習」での取得者は、初級が 71.3%、中級が 20.9%、上級指導員は 7.8%であった(図表 4-11)。ちなみに、上級指導員の養成講習会は、日本障害者スポーツ協会が年に 1 回開催し、中級は日本障害者スポーツ協会が年に 2 回と 4 道府県で年に各 1 回、初級は全国の都道府県・市区の 60 ヶ所で、地域主催で開催されている。

「認定校」で資格を取得した者は、86.6%が初級、中級 10.1%、上級 3.4%であった。この結果は、認定校で取得できる資格は初級が主であるためである、しかし、上級指導員が 3.4%存在し、中級指導員・上級指導員へと資格を更新している者もみられる。

「日本体育協会スポーツ指導者対象の講習」は、中級が 49.2%と最も多い。この講習は日本障害者スポーツ協会が主催するもので、日本体育協会公認スポーツ指導者資格保持者で 5 年以上の指導経験を持つ者を対象にしており、初級指導員を免除し、中級指導員から取得できる養成講習会である。

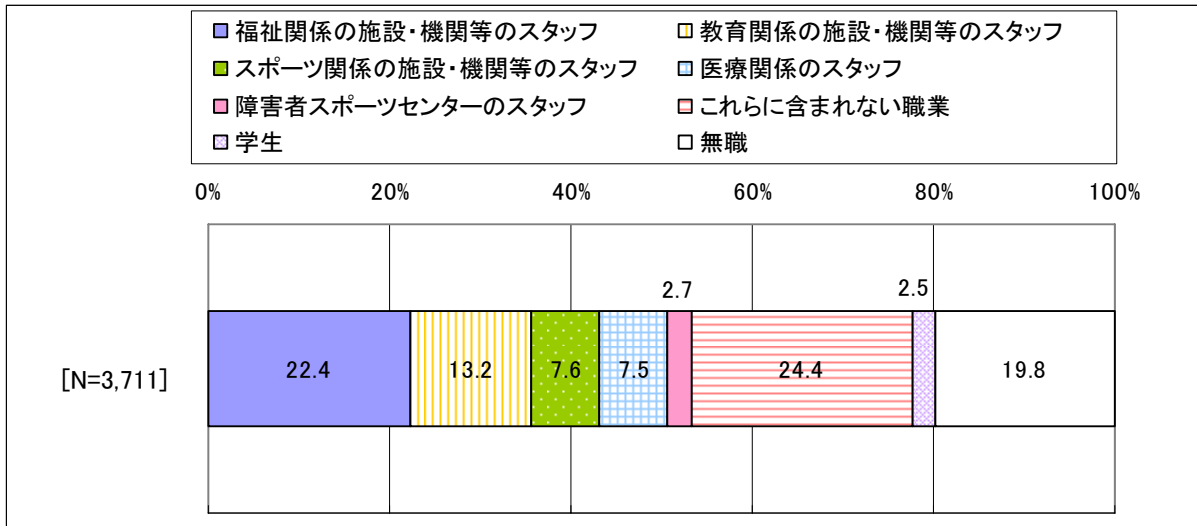
図表 4-11 資格の種類別取得状況(資格取得時の受講講習)



③ 職業別

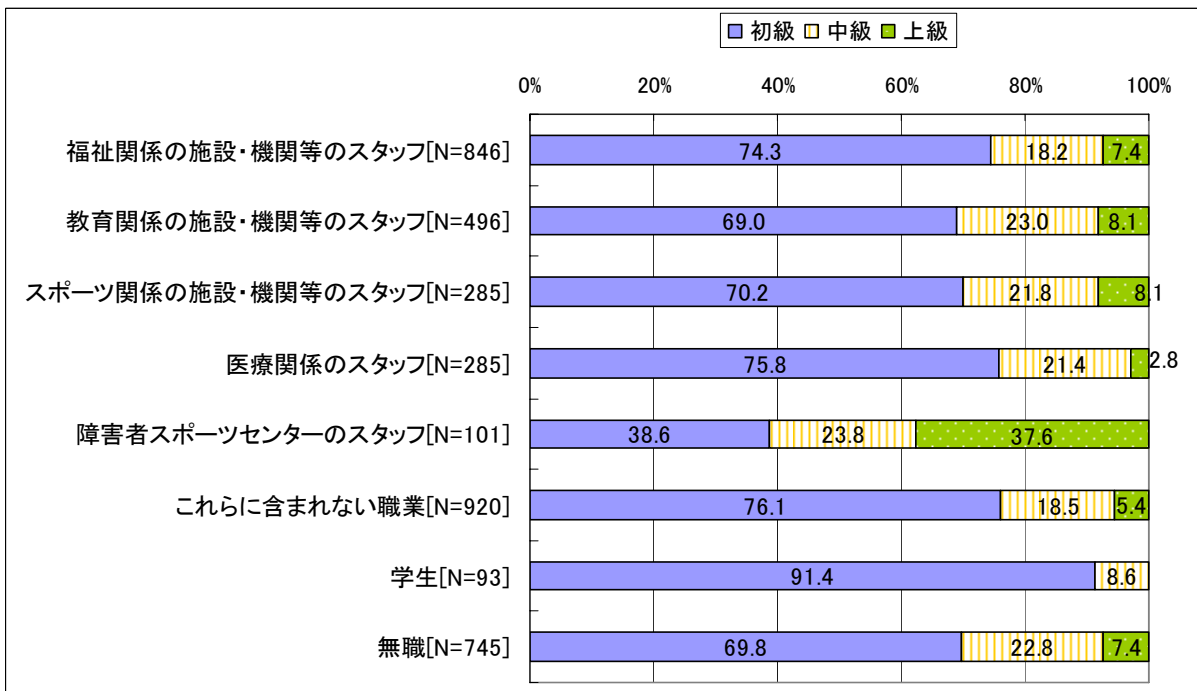
回答者の職業の状況を再度確認すると、「福祉関係の施設・機関等のスタッフ」が 22.4%と最も多く、次いで「無職」(19.8%)、「教育関係の施設・機関等のスタッフ」(13.2%)、「スポーツ関係の施設・機関等のスタッフ」(7.6%)、「医療関係のスタッフ」(7.5%)と続く(図表 4-12)。また、「これらに含まれない職業」と回答した者が 24.4%であった。

図表 4-12 職業の状況



職業別に資格種別の割合をみると、「障害者スポーツセンターのスタッフ」は、上級の指導員が 37.6%とおおよそ 4 割を占める(図表 4-13)。他の職業では上級指導員の割合は1割にも満たないことと比較すると、障害者スポーツセンターにおける上級指導員の割合の高さが際立った。一方、学生は 91.4%が初級で、上級指導員はみられなかった。

図表 4-13 資格の種類別取得状況(職業別)



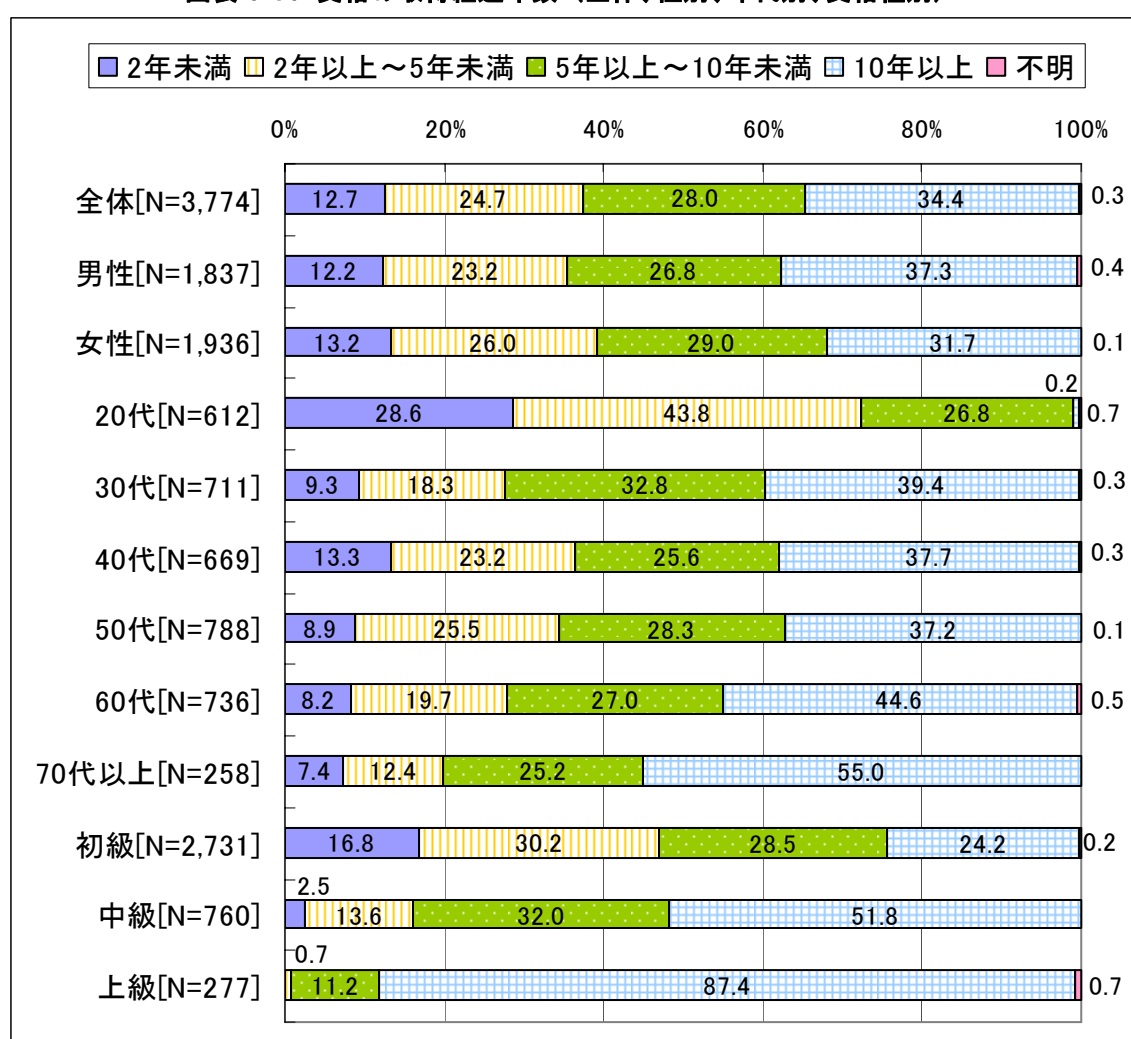
(2) 資格の取得経過年数

「最初に障害者スポーツ指導員資格を取得してから何年になりますか？」と尋ねたところ、全体では「10年以上」と答えた者が34.4%と最も多く、次いで、「5年以上～10年未満」(28.0%)、「2年以上～5年未満」(24.7%)であった。「2年未満」と答えた者は1割程度(12.7%)であった(図表4-14)。

性別にみると、男女ではほとんど違いはみられなかった。年代別では、「5年以上～10年未満」および「10年以上」の指導員の割合が、30代、60代、70歳以上で高かった。

資格種別にみると、初級指導員では「2年以上～5年未満」と答えた者が30.2%と最も多く、次いで「5年以上～10年未満」(28.5%)、「10年以上」(24.2%)と初級でも取得経過年数が長い者がいることがわかる。さらに中級・上級指導員は、「10年以上」が最も多く、中級指導員で半数以上、上級指導員では9割弱を占める。

図表4-14 資格の取得経過年数（全体、性別、年代別、資格種別）



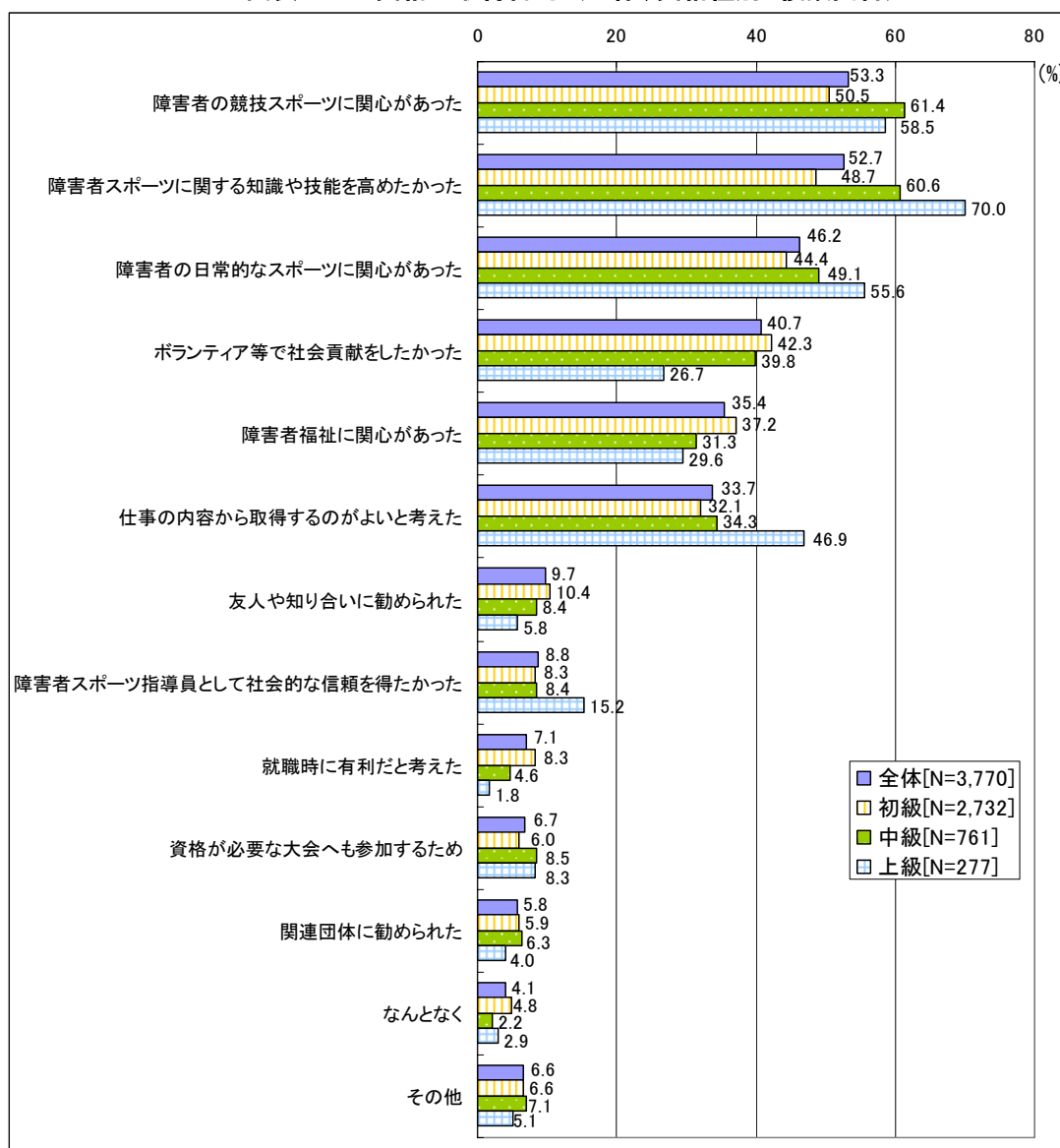
(3) 資格の取得目的

「あなたが障害者スポーツ指導員資格を取得した目的は何ですか？」を尋ねたところ、全体では「障害者の競技スポーツに関心があった」(53.3%)が最も多く、次いで「障害者スポーツに関する知識や技能を高めたかった」(52.7%)、「障害者の日常的なスポーツに関心があった」(46.2%)、「ボランティア等で社会貢献をしたかった」(40.7%)、「障害者福祉に関心があった」(35.4%)、「仕事の内容から取得するのがよいと考えた」(33.7%)であった(図表 4-15)。

資格種別でみると、「障害者の競技スポーツに関心があった」と答えた割合が高いのは中級指導員(61.4%)であり、「障害者スポーツに関する知識や技能を高めたかった」は上級指導員(70.0%)であった。

資格種別の特徴として、上級指導員は、「障害者の日常的なスポーツに関心があった」(55.6%)、「仕事の内容から取得するのがよいと考えた」(46.9%)も他の資格取得者よりも高い割合を示した。初級指導員では「ボランティア等で社会貢献をしたかった」(42.3%)、「障害者福祉に関心があった」(37.2%)の取得目的の割合が、中級・上級指導員よりも高い特徴がみられた。

図表 4-15 資格の取得目的 (全体、資格種別 複数回答)

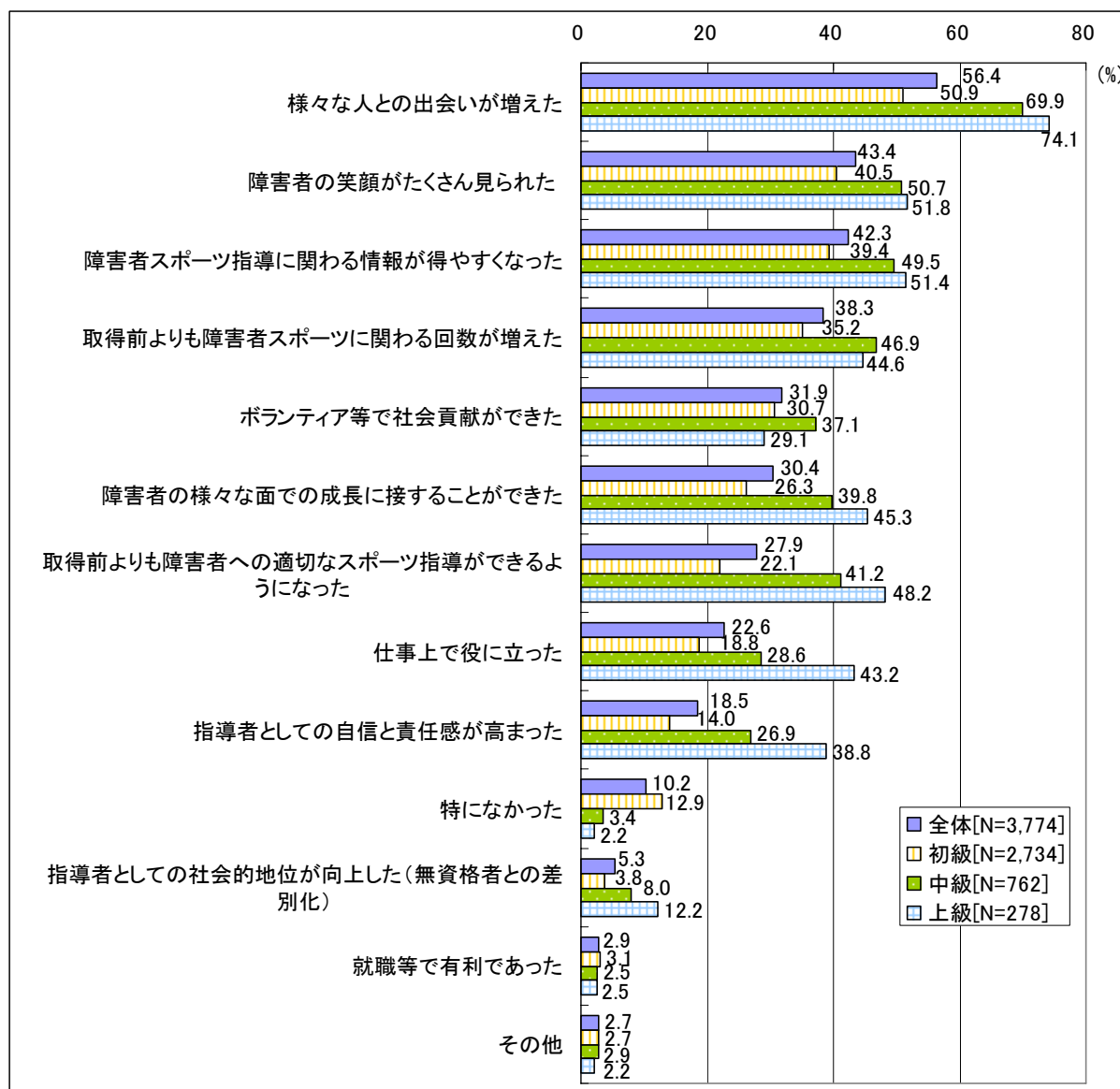


(4) 資格取得の利点

「あなたが障害者スポーツ指導員資格を取得してよかったことは何ですか？」と尋ねたところ、全体では「様々な人との出会いが増えた」が56.4%と半数以上の者が感じており、次いで「障害者の笑顔がたくさん見られた」(43.4%)、「障害者スポーツ指導に関わる情報が得やすくなった」(42.3%)、「取得前よりも障害者スポーツに関わる回数が増えた」(38.3%)などが、取得してよかったことと感じていた(図表 4-16)。

資格種別でみると、相対的に上級指導員の回答の割合が高い。上級の指導員は7項目において4割以上の者が利点を感じており、中級では5項目、初級では2項目と資格の級が上がるにつれて、より多くの利点を実感していた。中級の回答が高かった項目は「取得前よりも障害者スポーツに関わる回数が増えた」(46.9%)であり、資格取得により活動頻度の増加を利点として実感していることがわかった。

図表 4-16 資格取得の利点 (全体、資格種別 複数回答)



3. 3 指導員としての活動の状況

(1) 指導員としての活動頻度

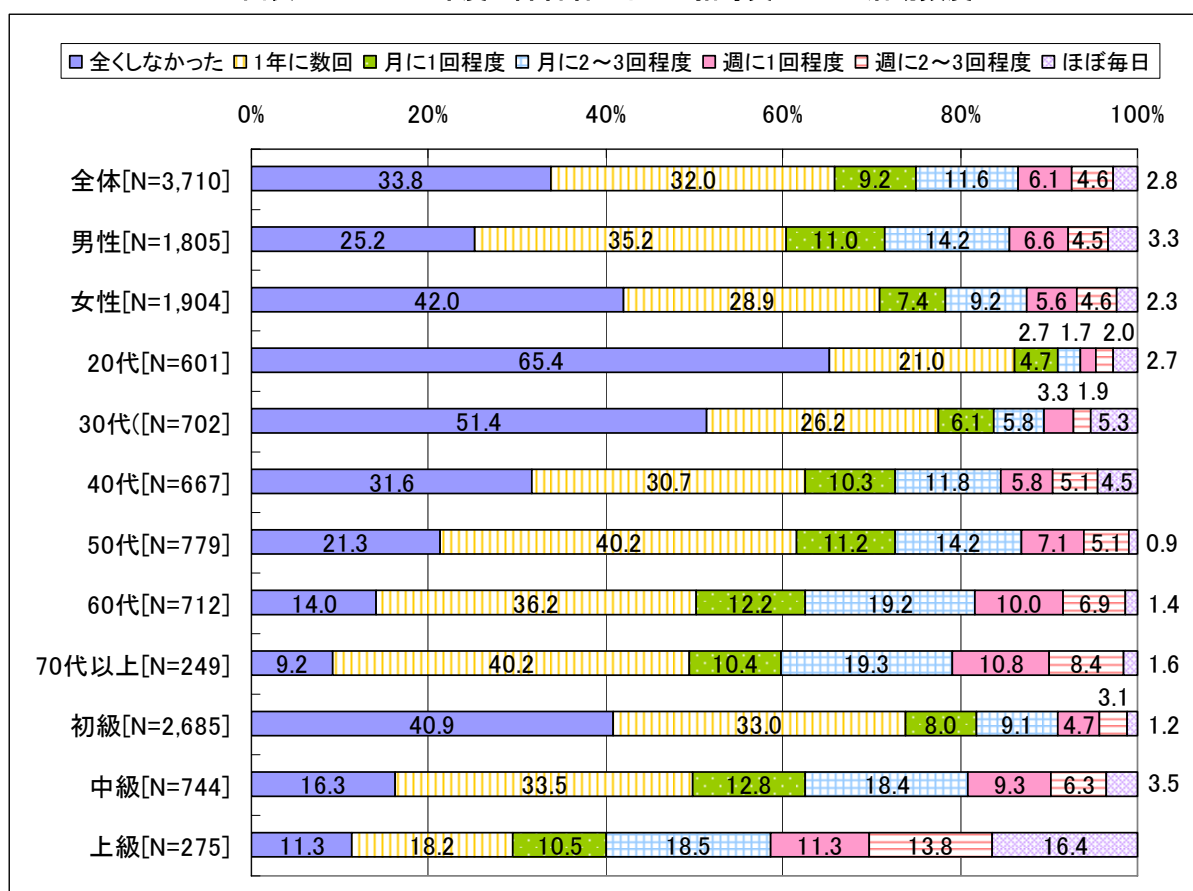
「昨年度、障害者スポーツ指導員としてどの程度活動しましたか？」と尋ねたところ、「全くしなかった」と答えた者が33.8%と最も多かった。一方、同じく指導員の34.3%は「月に1回以上」、13.5%の者は「週に1回以上」何らかの活動をしていることもわかった(図表4-17)。

性別でみると、「全くしなかった」と答えた者は、男性25.2%に対して女性は42.0%を占めていた。一方、「週に1回以上」活動している者では、男性(14.4%)と女性(12.5%)で男女の差はみられなかった。

年代別にみると、「全くしなかった」者の割合は、20代で6割を超え、次いで30代(51.4%)、40代(31.6%)と続く。20代では「月に1回程度」以上活動している者は、13.8%と少なかった。一方「ほぼ毎日」と答えた者は、30代で5.3%、40代で4.5%と高く、週に1回以上の割合でみると、70代以上(20.8%)、60代(18.3%)、40代(15.4%)、50代(13.1%)の順で高く、40代、50代の1割強、60代、70代以上の約2割が、定期的な活動者であることがわかる。

資格種別にみると、初級指導員で「全くしなかった」は4割を占め、週に1回以上定期的に活動している者は9.0%と1割程度であった。中級の指導員では「1年に数回」が3割と最も多く、次いで「月に2~3回程度」が2割、週1回以上定期的に活動している者は2割であった。上級指導員は、「ほぼ毎日」が16.4%で、週1回以上定期的に活動している者は4割を超えていた。

図表4-17 2011年度の障害者スポーツ指導員としての活動頻度

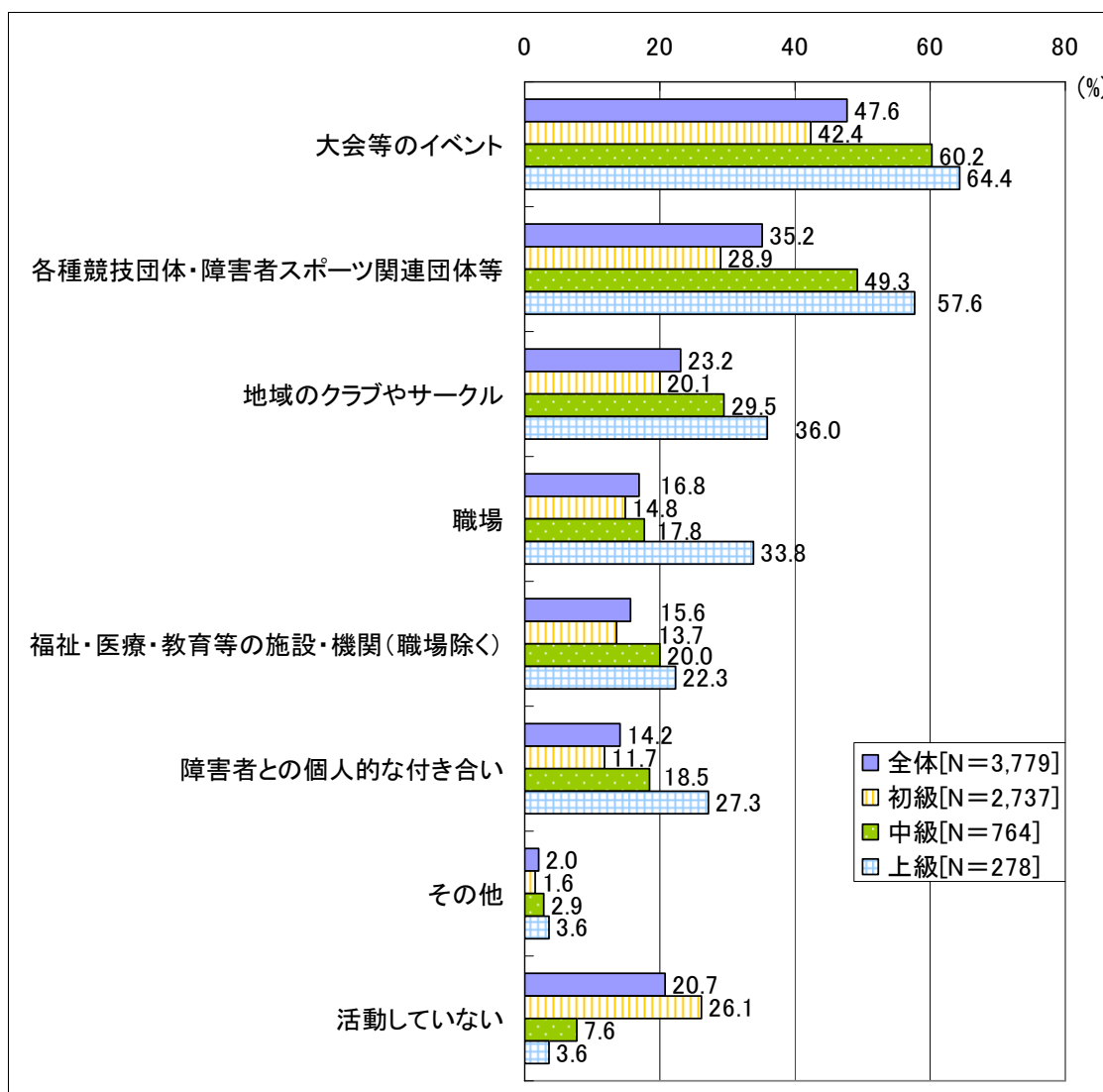


(2) 指導員としての主な活動場所

指導員として携わる主な活動場所について尋ねたところ、全体で最も多かったのは「大会等のイベント」の47.6%で、イベントという非日常的(不定期)な活動であった(図表4-18)。次いで「各種競技団体・各種障害者スポーツ関連団体等」(35.2%)、「地域のクラブやサークル」(23.2%)の順となった。また、「障害者との個人的な付き合い」で活動している指導員も1割強(14.2%)存在していた。

資格種別にみると、全ての活動場所で資格の級が高いほど、活動している割合が高く、活動場所が多いことがわかる。一方、初級の指導員もイベントや団体、地域のクラブ、職場、福祉等の施設など、あらゆる活動場所で一定数活動していることも確認できた。

図表 4-18 障害者スポーツ指導員としての主な活動場所（全体、資格種別 複数回答）

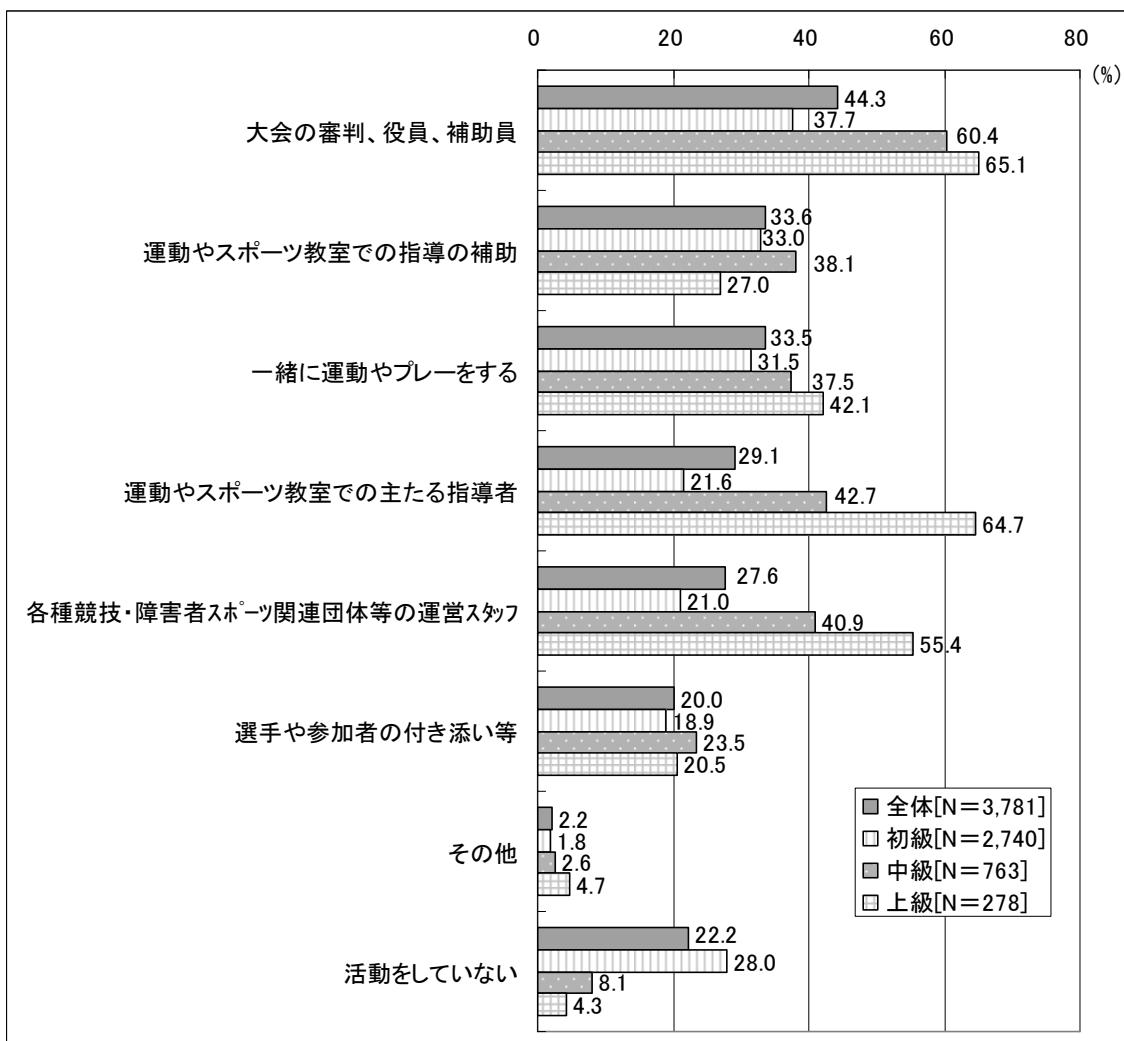


(3) 活動場所での主な役割

指導員としての活動の場での主な役割について尋ねたところ、全体では「大会の審判、役員、補助員」が 44.3%と最も多く、次いで「運動やスポーツ教室での指導の補助」(33.6%)、「一緒に運動やプレーをする」が 33.5%であった(図表 4-19)。また、「運動やスポーツ教室での主たる指導者」は、全体の 3 割程度(29.1%)であり、多くの指導員が、指導以外の補助や付き添い、団体の運営等の役割を担っていることがわかった。

資格種別でみると、「大会の審判、役員、補助員」「運動やスポーツ教室での主たる指導者」「各種競技・障害者スポーツ関連団体等の運営スタッフ」では、資格の級が高いほど割合が高くなっている。特に「運動やスポーツ教室での主たる指導者」では、初級の 21.6%に対し、中級 42.7%、上級 64.7%とその傾向が顕著である。資格の級が高い指導者ほど、多くの役割を担っていることがわかる。

図表 4-19 障害者スポーツ指導員としての活動の場での主な役割（全体、資格種別 複数回答）



3. 3 指導員としての活動の評価および問題点

(1) 活動状況に対する満足度

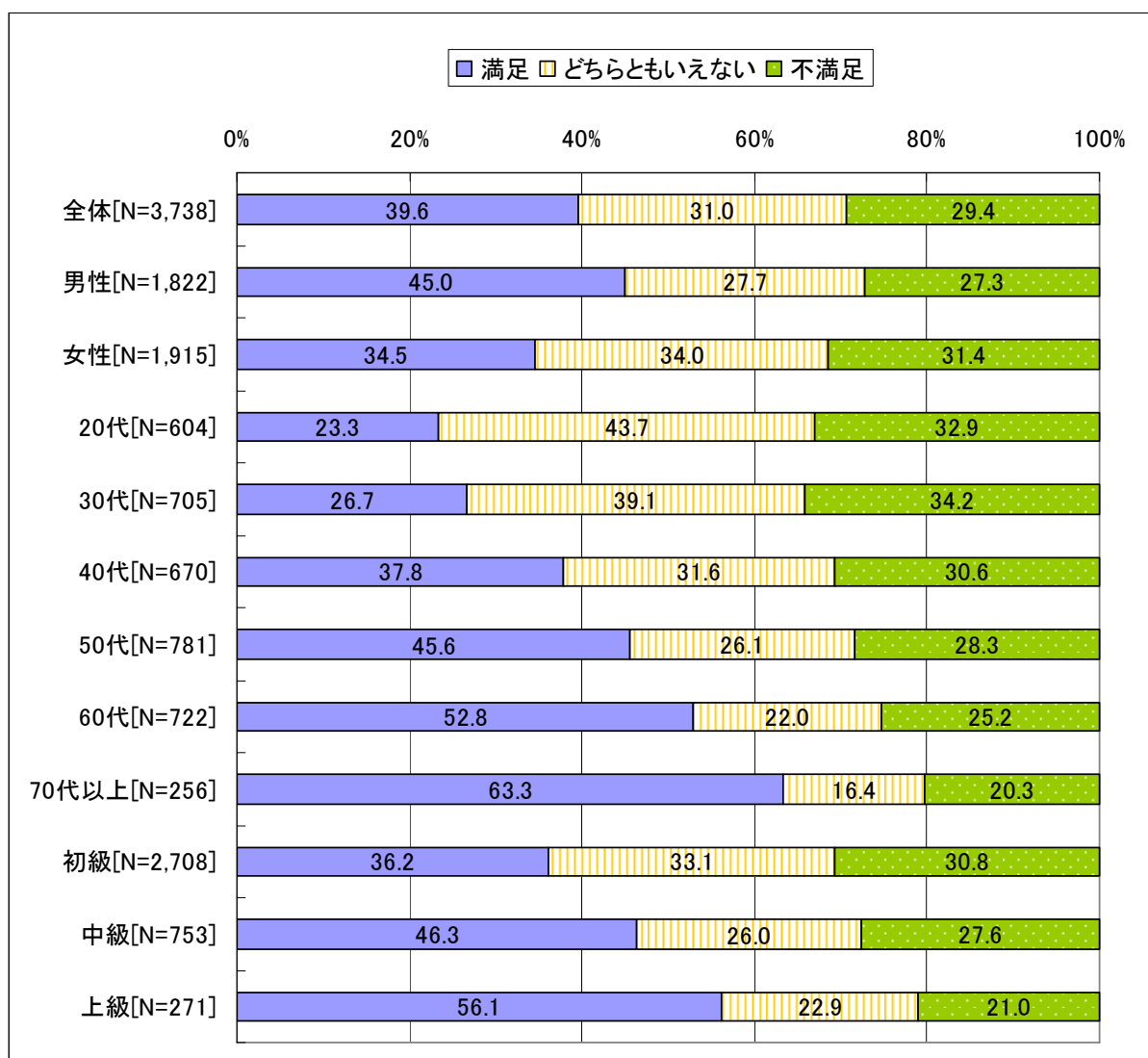
「障害者スポーツ指導員として今の活動状況に満足していますか？」と尋ねたところ、全体の 4 割 (39.6%) の者が現在の活動に「満足」と答えている(図表 4-20)。一方、「満足していない(不満足)」者は、全体の 3 割 (29.4%) を占めていた。

性別にみると、現在の活動状況に満足しているのは、男性が 45.0%、女性が 34.5%と女性のほうが 10.5 ポイント低いことがわかった。

年代別では、年代が高くなるにつれて、満足度が高くなっていった。

資格種別にもと、上級指導員では半数以上 (56.1%) が満足であると答えており、資格のレベルが上がるにつれて満足度が高くなっていった。

図表 4-20 現在の活動状況の満足度(全体・性別・年代別・資格種別)



(2) 指導時の不安度

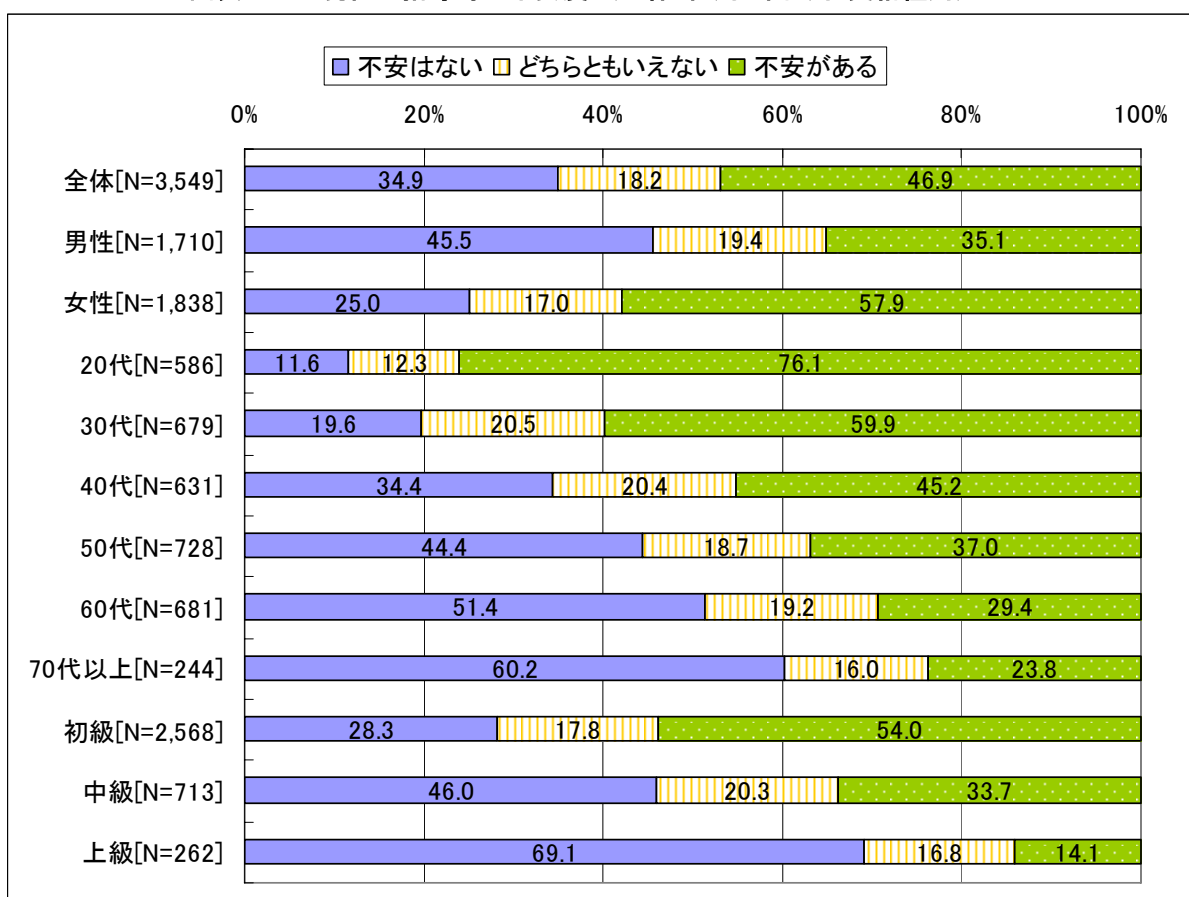
「障害者にスポーツや運動を指導しようとする時は、不安なく指導することができますか？」と尋ねたところ、全体の3割強(34.9%)の者は指導時に「不安はない」と回答している。一方、「不安がある」者は4割強(46.9%)を占めており、指導時に不安に思っている指導員の割合が高いことがわかった(図表4-21)。

性別にみると、「不安はない」と回答した男性は45.5%、女性は25.0%と20.1ポイント男性が高く、一方、「不安がある」者は男性の35.1%に対し、女性では57.9%と22.8ポイント女性が高かった。

年代別にみると、「不安がある」と回答する者の割合は、年代が上がるにつれてその割合は低くなる。20代においては、7割以上が指導時に不安を感じていた。

資格種別では、初級指導員の5割(54.0%)が指導時に不安を感じており、上級指導員の14.1%と比べて大きな差がみられた。また、初級・中級・上級へと資格の級が上がるにつれて不安度は低くなっていた。

図表 4-21 現在の指導時の不安度（全体・性別・年代別・資格種別）

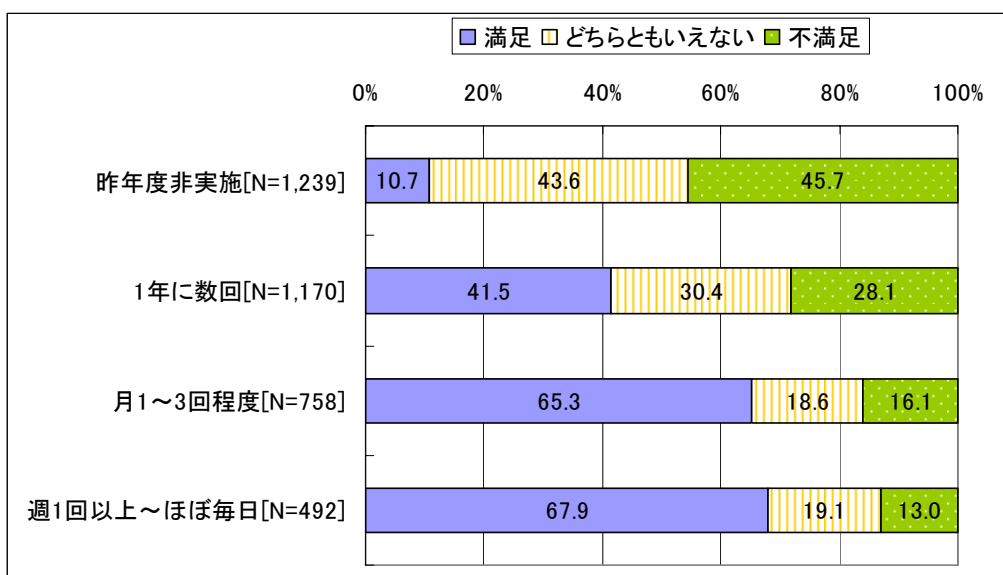


(3) 活動頻度と満足度・不安度の関連

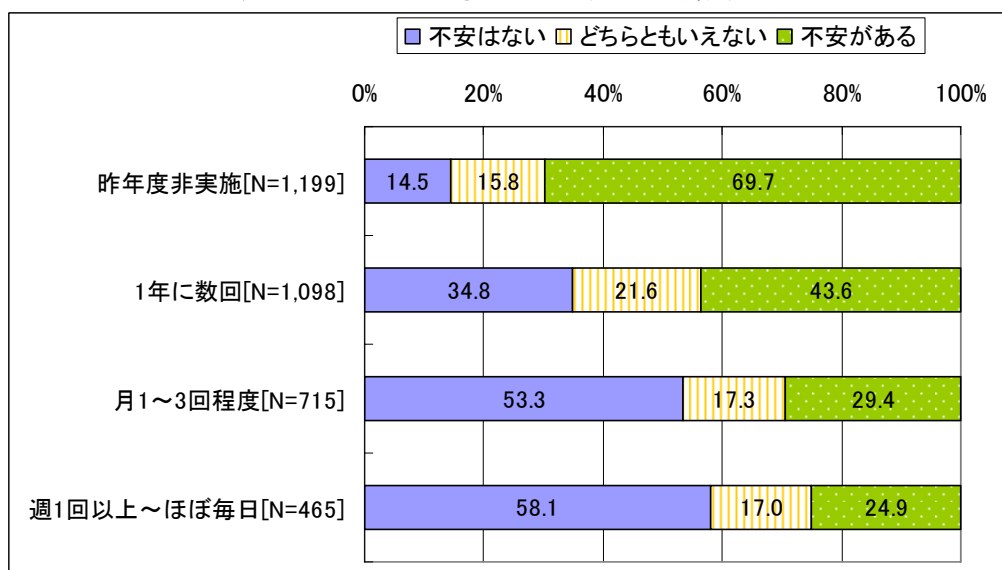
活動頻度の状況と、現状の活動状況の満足度、ならびに指導時の不安度との関連についてみた。現在の活動状況の満足度については、活動頻度が高くなるにつれて満足度も高くなることがわかる(図表 4-22)。「満足している」と答える者の割合が、「月 1～3 回程度」で 65.3%、「週1回以上～ほぼ毎日」で 67.9%となり、活動頻度が月 1 回以上であれば、6 割以上の者が現状の活動に満足していた。

次に、指導時の不安度についてみると、活動頻度が高くなるにつれて、指導時の不安度は低くなる(図表 4-23)。満足度と同様、活動頻度が「月 1～3 回程度」以上であれば、半数以上の者は「不安はない」と感じている。一方、週 1 回以上活動している指導員でも、4 人に 1 人(24.9%)は「不安がある」と答えている。

図表 4-22 現在の活動状況の満足度(活動頻度別)



図表 4-23 現在の指導時の不安度(活動頻度別)



(4) 指導時の不安要素

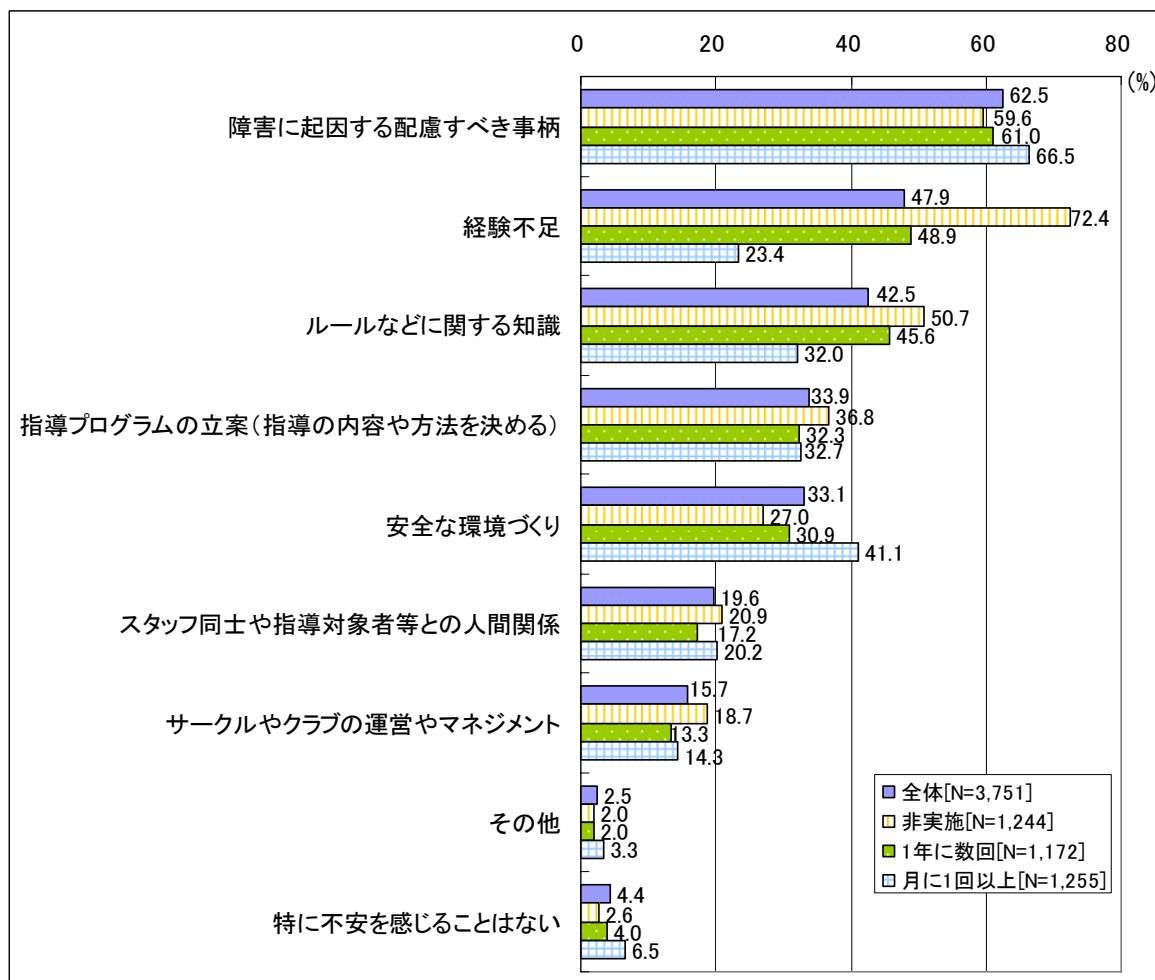
「障害者にスポーツや運動の指導等をする時、何に不安を感じますか？」と指導時の不安要素を尋ねたところ、「障害に起因する配慮すべき事柄」が 62.5%と最も多く、次いで「経験不足」(47.9%)、「ルールなどに関する知識」(42.5%)、「指導プログラムの立案(指導の内容や方法を定める)」(33.9%)と続く(図表 4-24)。

活動頻度の状況を、「非実施」「1年に数回」「月に1回以上」の3群に分け、指導時の不安要素との関連をみたところ、「非実施」群では7割以上の者が「経験不足」(72.4%)を一番の不安要素にあげており、次いで「障害に起因する配慮すべき事柄」(59.6%)、「ルールなどに関する知識」(50.7%)について、不安に思っている者の割合も高かった。

「1年に数回」群では、「障害に起因する配慮すべき事柄」が 61.0%と最も高く、次いで「経験不足」(48.9%)、「ルールなどに関する知識」(45.6%)があげられる。

「月に1回以上」群では、「障害に起因する配慮すべき事柄」が 66.5%と他の活動頻度群より高く、次いで「安全な環境づくり」(41.1%)、「指導プログラムの立案(指導の内容や方法を定める)」(32.7%)が不安要素にあげられていた。「障害に起因する配慮すべき事柄」や「安全な環境づくり」に関しては、活動頻度が高くなるほど不安要素だと感じていることがわかった。

図表 4-24 指導時の不安要素（全体、活動頻度群別 複数回答）

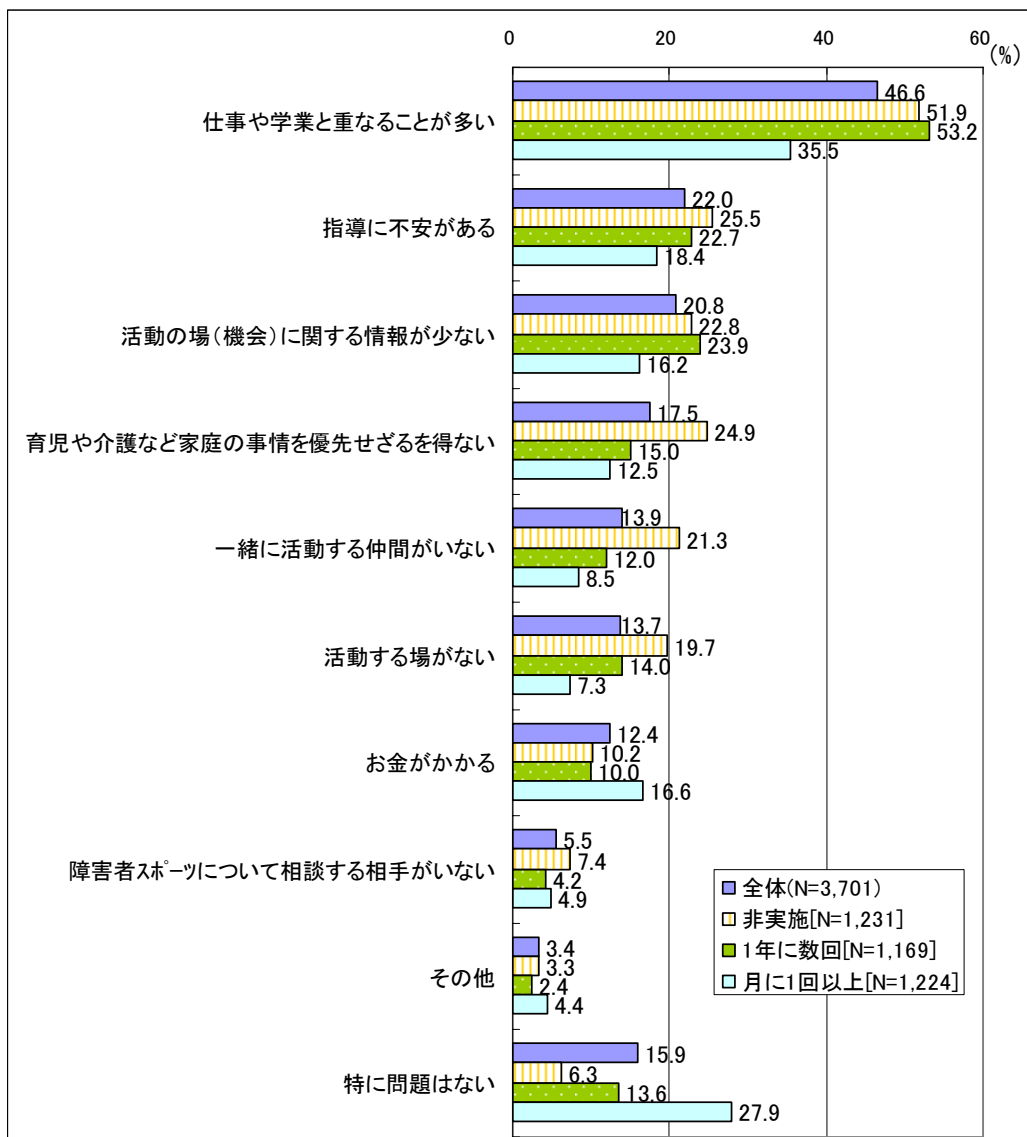


(5) 活動に携わる際の問題点

「あなたが障害者のスポーツ活動に携わる際の問題点は何ですか？」を尋ねたところ、「仕事や学業と重なることが多い」が46.6%と最も多く、次いで「指導に不安がある」(22.0%)、「活動の場(機会)に関する情報が少ない」(20.8%)、「育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない」(17.5%)などを問題点としていた(図表 4-25)。

活動頻度を、「非実施」「1年に数回」「月に1回以上」の3群に分けて活動の際の問題点をみたところ、「非実施」群では、「仕事や学業と重なることが多い」(51.9%)が最も多く、次いで「指導に不安がある」(25.5%)、「育児や介護など庭の事情を優先せざるを得ない」(24.9%)、「一緒に活動する仲間がいない」(21.3%)を問題点としていた。「1年に数回」群では、「仕事や学業と重なることが多い」(53.2%)が半数以上で、次いで「活動の場(機会)に関する情報が少ない」(23.9%)、「指導に不安がある」(22.7%)、「育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない」(15.0%)を問題点と感じている。「月に1回以上」群では、「仕事や学業と重なることが多い」をあげる者が最も多いが、他の活動頻度と比べて35.5%とその割合は低い。次いで「指導に不安がある」(18.4%)、「お金がかかる」(16.6%)を問題点と感じているが、「特に問題は無い」と回答する者も27.9%と3割弱いることがわかった。

図表 4-25 活動する際の問題点(全体、活動頻度群別 複数回答)

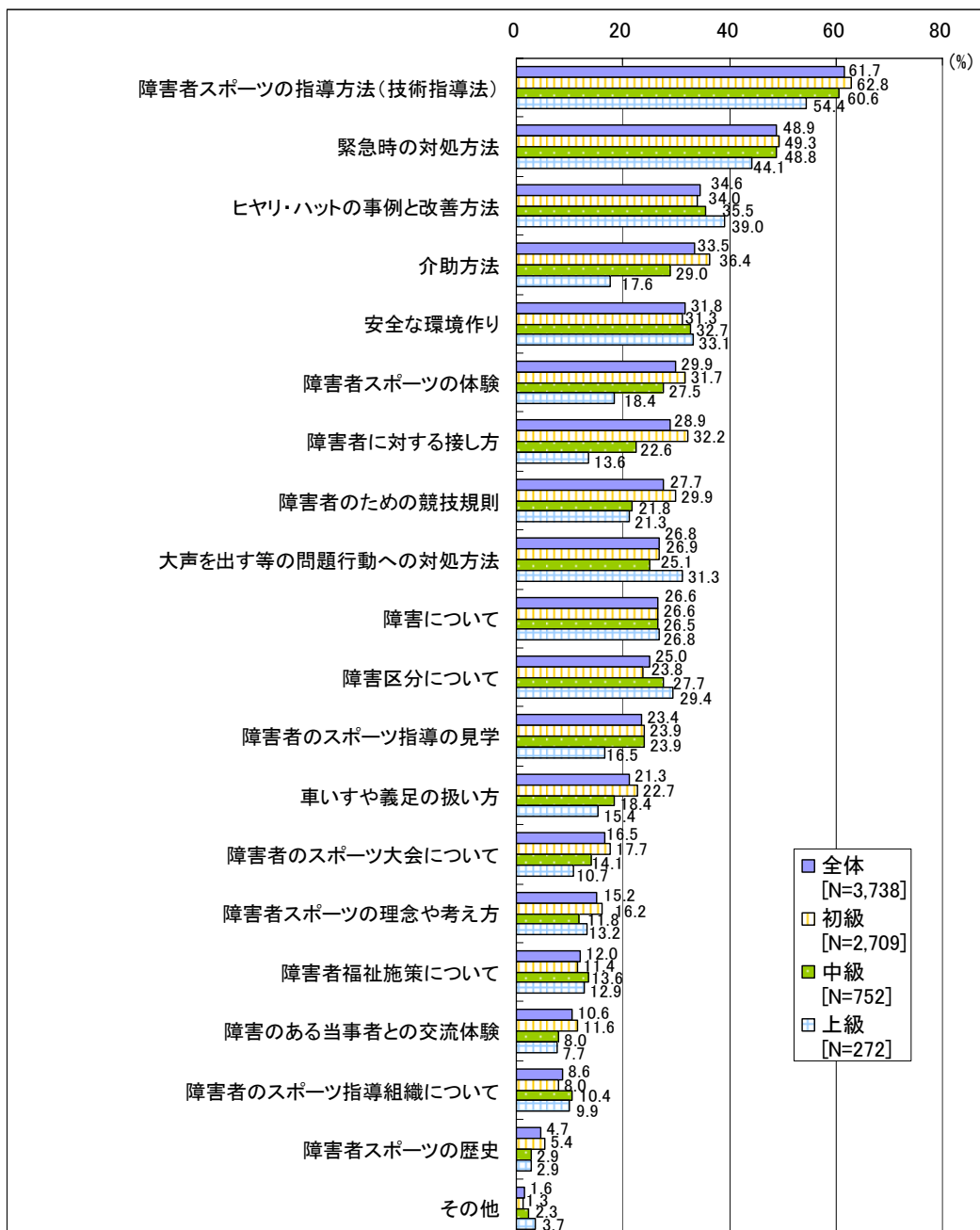


(6) 今後希望する研修内容

今後の研修会で受けたいと思う内容について尋ねたところ、「障害者スポーツの指導方法(技術指導法)」が61.7%と最も多く、次いで「緊急時の対処方法」(48.9%)、「ヒヤリ・ハットの事例と改善方法」(34.6%)、「介助方法」(33.5%)、「安全な環境作り」(31.8%)、「障害者スポーツの体験」(29.9%)等をあげていた(図表4-26)。

資格種別にみると、初級指導員は「障害者スポーツの指導方法(技術指導法)」(62.8%)や「緊急時の対処方法」(49.3%)、「介助方法」(36.4%)、「障害者スポーツの体験」(31.7%)、「障害者に対する接し方」(32.2%)、「障害者のための競技規則」(29.9%)の研修内容を希望していた。上級指導員は、初級・中級よりも「ヒヤリ・ハットの事例と改善方法」(39.0%)、「大声を出す等の問題行動への対処方法」(31.3%)の希望が高かった。また、「安全な環境作り」に関する内容は、資格を問わず希望が高い研修内容であった。

図表4-26 今後、研修会で受講したい内容（全体、資格種別 複数回答）

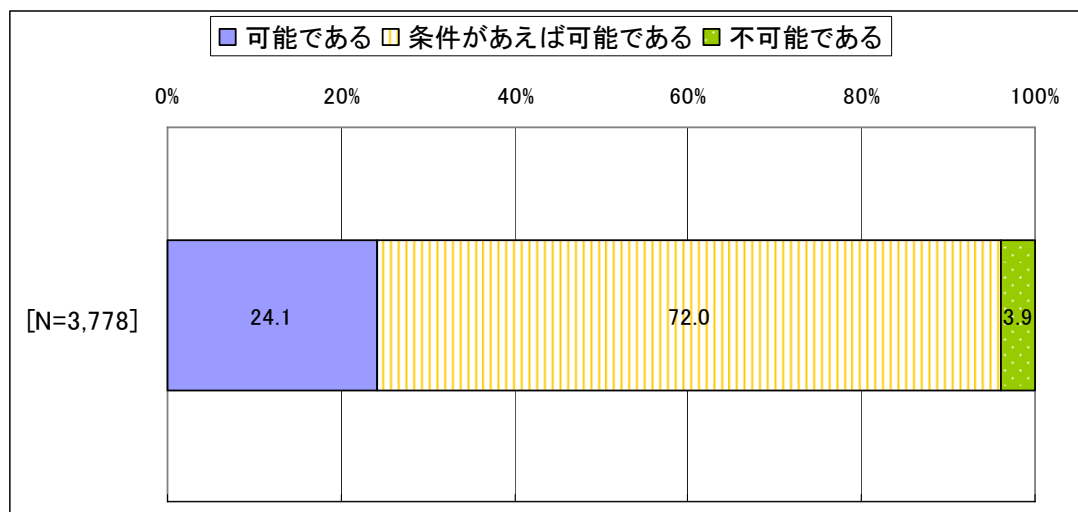


(7) 今後の協力依頼への対応の可能性および活動希望頻度

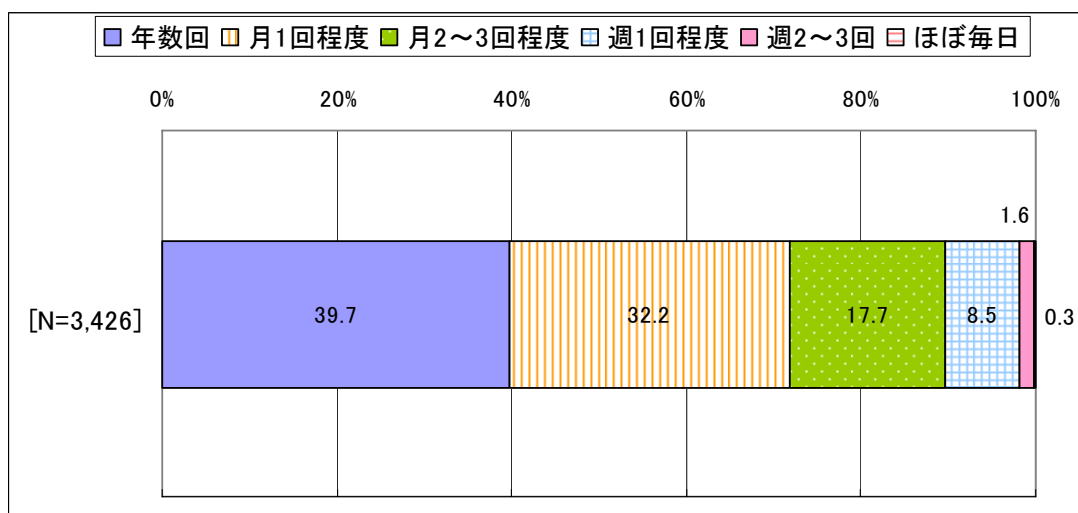
「今後、あなたの近くの障害者施設や障害者個人からスポーツや運動などにおける協力の依頼があれば、協力することは可能ですか？」と尋ねたところ、「可能である」と答えた者が 24.1%、「条件があれば可能である」72.0%、「不可能である」は 3.9%であった(図表 4-27)。

さらに、「可能である」と「条件があれば可能である」と答えた指導員に、活動する際の条件としての活動希望頻度を尋ねたところ、「年数回」が 39.7%と最も多く、次いで「月 1 回程度」32.2%、「月 2～3 回程度」17.7%、「週 1 回程度」8.5%。「ほぼ毎日」と回答した者は 0.3%であった(図表 4-28)。

図表 4-27 協力依頼への対応の可能性



図表 4-28 協力する際の活動希望頻度



注) 図表 4-27 で示した「可能である」「条件があれば可能である」と回答した 3,631 人に対して、図表 4-28 の質問を行ったところ、205 人が未回答だったため、分析対象のサンプル数が少なくなっている。

(8) 上の指導員資格（中級・上級）の取得希望

「今後さらに上の指導員資格(中級指導員、上級指導員など)の取得を考えていますか?」と尋ねたところ、初級指導員の中級・上級指導員資格への取得希望は「是非取得したい」「可能であれば取得したい」をあわせて46.5%の者が、中級指導員では48.5%の者が上級指導員の取得希望を示していることがわかった(図表4-29)。今後、希望者に適確な受講の機会が提供できれば、新たな中級・上級指導員の確保が期待できると思われる。

図表 4-29 上の指導員資格(中級・上級)の取得希望 (資格種別)

